

兵庫県産テツイロヒメカミキリを追う —初記録から明石市での採集まで—

三木 進¹⁾

はじめに

明石市大久保町西島の自宅マンションの庭で、2012年6月にテツイロヒメカミキリ *Ceresium sinicum* を採集し、以来、発生木も確認した。1984年発行の「日本産カミキリ大図鑑」(以下「大図鑑」)、2007年の「日本産カミキリムシ」(以下「検索図鑑」)とも、分布地域を主に「京浜、阪神、北九州」とし、分布が局所的で、かつ都市部とその周辺に限られることから、「外国からの移入由来」と推察している。手持ちの資料は限られているが、記録をたどってみると、「兵庫県に昔からいたのか」という疑問もわいてきた。「阪」と「神」、大阪と兵庫に分けて、分布の広がりを探ってみた。

最初の一頭は灯火に

自宅マンションは高さ3mほどの擁壁の上に建っている。下に幼稚園の緑地があり、横に赤根川の旧河道に沿った河畔林が残り、緑道になっている。2002年から4～11月の間、ほぼ毎晩、一階の庭先で灯火採集を行ってきた。光源はブラックライト5本(計100W)とケミカルランプ1本(20W)。

2012年6月13日午後10時頃、まず1♀が白布に飛来。翌14日の同時刻にも1♀が飛来し、ベランダの天井部分をはっていた。

あまりにも唐突な出現だったので、少し調べてみようと2012年の「きべりはむし」への短報投稿は見送った。

翌2013年6月には、普段より注意を払ったが、飛来は確認できなかった。

ハギをホストに

狭い庭をバタフライガーデンにし、各種の食草を植えている。2006年7月、マメ科の補強としてハギ類を植えた。品種名「江戸絞り」とマルバハギの二株である。小さな苗だったが、地下植えすると大きく育った。

2014年3月20日、株立ちしたハギ(江戸絞り)の一本が枯れ、カミキリ科独特の「粉」を吹いているのに気付いた。根元の太い部分が直径4.5cm。途中から枝分かれし、直径2cmほどの枯れ枝を長さ1.2mほど切り取り、材箱で管理した。同じくベランダの高さ1.5mほどの所にある植木道具の箱に仕舞っておいたマルバハギ等、ハギ類の直径5～8mm、長さ15cmの枯れ枝からも同様の粉が吹き出しており、一部を飼育ケースに移した。

果たして「江戸絞り」から2014年5月18日、テツイロヒメカミキリの2♂が羽脱した。2日おいて、さらに1♂が出てきた。マルバハギの小枝のケースを見ると、1♀が羽脱し、すでに死んでいた。極端に乾燥していたので、霧吹きを掛けると、カビが生えてしまった。

2014年も灯火には飛来しなかった。しかし、本種は乾燥した材を利用していることから、雨の当たらない場所に、長さ50～60cmの各種の枯れ枝をおいて、「トラッ



写真1 2012年に飛来した2♀。



写真2 自宅のミニバタフライガーデン。左手前でナイターをしている。

¹⁾ Susumu MIKI 兵庫県明石市



写真3 粉を吹いたハギ類の小枝の一部 (下の部分).



写真4 ハギの枯死部から羽脱したテツイロヒメカミキリ♂.



写真5 乾いた枝からは、粉が噴き出した (2014年8月20日撮影).



写真6 ハナムグリ類は多かったが、本種は確認できなかった.

プ」とした。予想通り夏には、ハギ類、フサアカシヤ (ミモザ)、ウメ、ソメイヨシノ、エノキから、大量の粉が出ているのを確認した。片や、雨が当たる部分に置いた同様の枯れ枝には、食痕は見られなかった。

生木の枯死部、つまり幹に付いたままの枯れ枝や枯れ蔓を選択的に利用していることが分かった。また、乾燥に強いゆえに、木工品などについて、簡単に分布を広げたであろうことも伺えた。2015年には多くの本種が羽脱するだろう。

「日本産カミキリムシ食樹総目録」(改訂増補版, 2011)によると、ヤナギ類、カシ類、ハギ類、ミカン類はじめ、29種が宿主として知られているという。ヒマラヤスギ、イチョウまで含まれるので、樹種よりもカラカラに枯れているという「状態」の方が重要なだろう。今後も、さまざまな樹種でトラップを掛けてみたい。

一方、訪花性も知られており、大阪府下ではネズミモチ、アカメガシワ、ボダイジュ等の花をスイーピングすると採集できるという。6月に、自宅周辺で満開のネズミモチの花を何度か掬ったが確認できなかった。灯火以外、野外では採集しにくいという評判通りだった。

形態的な差異

分布の問題に入る前に、まず形態を精査しなくてはならない。何故なら、『検索図鑑』等によると、京浜、阪神の本州産と九州産とでは形態が異なり、さらに「九州産の個体群もいくつかの系統に分類される可能性があり、詳細な検討が必要である」という。

本州産と九州産の区別点は、

- ①前胸背板の両側は本州産が弧状で、九州産はほぼ平行
- ②前胸背板の側方の毛は本州産がやや疎ら、九州産は密
- ③♂の上翅は、本州産が短く、先端に向けて緩やかに狭まるのに対し、九州産は長く、先端に向けて直線的に狭まる

比較標本は和歌山県産しか持っていないが、明石産の6頭は、いずれも本州産の特徴を示していた。体長は♂が9.6～11.2mm、♀が9.7～13.0mmだった。和歌山産は♂が13.9mm、♀が15.2mmなので、明石産は栄養状態が悪いのか、かなり小さかった。

大阪の分布は

古い文献に当たってみた。1946年7月発行の『新日本産天牛科目録』（関公一、関昆虫学研究所）。関氏は、旧住吉村反高林（現神戸市東灘区）に研究所を設け、物資のない終戦から1年足らずでB5判130頁の本書を300部出版している。「はしがき」には、ポツダム宣言受諾で領土が半減するので、「新生日本のカミキリ目録」の出版の意義を語られている。

その中で、テツイロヒメカミキリの分布は日本（九州）、台湾、中国、海南島となっている。そしてサカイヒメカミキリ *Ceresium sakaiense* が、本州に分布するとしている。サカイヒメカミキリは大図鑑によると、1931年6月18日に大林氏が大阪・堺で採集した1♀により、1933年に松下氏が記載。現在ではテツイロヒメカミキリのシノニムとされている。テツイロヒメカミキリ自体は、1873年に長崎で採集されている。

次に1959年発行の『新しい昆虫採集（下）』（京浜昆虫同好会編）では、テツイロヒメカミキリは、産地は九州に限り、「6～8月、非常に稀」とされ、「2亜種があり、いずれも中国に産す。本州では神奈川県逗子市で16. vi. 1943に約30頭、5. iv. 1939に1頭いずれも灯火で採集されている」とある。サカイヒメカミキリには触れられていない。九州・長崎で見つかり、58年後に大阪・堺で、さらに8年後に京浜・神奈川で発見された。

しかし、1966年発行の『原色日本昆虫図鑑（上）・甲虫編』では、解説の和名はテツイロヒメカミキリだが、写真説明はサカイヒメカミキリと、二つの和名が使われている。「南方系天牛類」として分布図が添えられ、関東は2地点、先の神奈川・逗子と東京都と埼玉、千葉県の境界辺りが示されている。関西では堺と和歌山県の護摩壇山が挙げられているだけだ。

カミキリ愛好家が急増するきっかけとなった1969年発行の『原色日本昆虫生態図鑑Iカミキリ編』（小島圭三、林匡夫共著）では、大阪市東住吉区の雌雄の標本が図版に使われ、「大阪では南部上町台地に沿い暖帯林の残る地点で灯火に集まる」と書かれている。現在では、大阪市の中心部でも採集され、堺で発見されて以来、少しずつ分布を広げているようだ。

兵庫の古い記録が見つからない

では、阪神の「神」、兵庫の記録はというと、1983年までのデータを集めた高橋寿郎氏のカミキリ目録には、テツイロヒメカミキリもサカイヒメカミキリも見つからない。

初出は、1989年発行の『きべりはむし 17巻2号』。1984年6月30日、宝塚市安倉北4、安倉上池で採集された1♀だ。「市内であまり見かけない種」として、新家勝氏が短報を寄せている。「天王寺川からの取水路で、

溜り水で、もがいていた」のを採集し、東正雄氏が同定、高橋寿郎氏らが発表を勧めたという。高橋氏らの情報として、大阪府下箕面方面での記録はかなりあるが、「兵庫県内での記録はどうもないようである」と書かれている。

「阪神間」には、昔から多くの研究者やアマチュアの虫屋がいた。自宅近くに棲むはずの本種が採集されていないのは、兵庫の甲虫類の大御所、高橋、東両氏のお墨付き通り、1984年までは、極めて稀だったか、まだ分布していなかったのではと考える。

図鑑の「阪神」という言葉は、京浜に対応して使われているようで、「大阪近辺」という程度の意味合いではなかったかとも思えてくる。実際、1984年発行の大図鑑では、本文では分布を「阪神地方」としながら、分布図の兵庫県は空白のままだ。

相次ぐ確認

県内の2例目は14年後の1998年7月6日。前田守氏が伊丹市北本町で1頭採集。『兵庫県のカミキリムシ』（2001年、廣田嘉正、三木三徳、八木正道）のデータだ。3例目が「月刊むし No521」（2014）の短報。西宮市一里山町で2008年、田中稔氏が町内会の餅つきの際に、「白い粉をふいた腕くらいの太さのミカン類の木」を発見。水槽に入れていたところ、2009年6月に100頭ほどが羽脱したという。この木が、どこから持ち込まれたのかは書かれていないが、地元のものだろう。今回の明石が、4例目となるようだ。

大阪から少しずつ分布を拡大しているのだろうが、このところの温暖化は乾燥を好む本種にとっては、何よりの勢力拡大のチャンスだ。カシ類の枯死もあるだろう。

他府県に目をやると、和歌山、三重県にも分布しているが、2010年3月に、愛知県日進市でアカメガシワの枯れ枝から12頭が羽脱、6月にはたたき網で1頭採



写真7 明石市西部で採集されたテツイロヒメカミキリの3♂。



写真8 エノキの枯れ枝。右の穴から蛹室の詰め物が見える。



写真9 内部で蛹化した。

集されたという。『さやばねニューシリーズ No4』(日本甲虫学会, 2011)に小西・長谷川の短報が出ていた。京浜、阪神に次いで、中京圏での初めての記録である。もちろん京浜では、東京都内でも採集例が増えているという。

おわりに

2015年1月中旬に、テツイロヒメカミキリが穿孔した直径8mmほどのエノキの枯れ枝を割ってみた。幼虫は、心材部の一部だけを残し、樹皮下から心材部までを徹底的に利用している。右の節の部分に、やや長い木屑、咬削片による詰め物が見られたので、蛹室があると考え、削り出してみた。前蛹だったが、翌日蛹化した。3月には成虫になるだろう。

帰化種と考えられ、分類が少しややこしいこともあって、採集報告があまりないのだろうが、条件が整えば採集できる種類だと思う。明石の自宅の場合は、幼稚園や西隣の小学校で、ソメイヨシノやヤエザクラが数年前から太い枝ごと枯れはじめ、多くは枯れたまま幹に残っている。こうした環境条件もあって、本種の発生を容易にしたのだろうと考えている。

いずれにしても、限られた資料によるアマチュアの推察にすぎないが、たたき台としてお読みいただきたい。そして「採集している」「こんなデータもある」と教えていただきたい。加えて、枯れ枝のトラップも、試していただきたい。

参考文献

- 日本鞘翅目学会, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社
 大林延夫・新里達也共著, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会
 小島圭三・中村慎吾編著, 2011. 日本産カミキリムシ食樹総目録(改訂増補版). 比婆科学教育振興会
 関公一, 1946. 新日本産天牛科目録. 関昆虫学研究所

廣田嘉正・三木三徳・八木正道, 2001. 兵庫県のカミキリムシ.

京浜昆虫同好会編, 1959. 新しい昆虫採集(下). 内田老鶴圃

中根猛彦監修・日本甲虫学会編, 1966. 原色日本昆虫図鑑(上・改訂版)・甲虫編. 保育社

小島圭三・林匡夫共著, 1969. 原色日本昆虫生態図鑑I カミキリ編. 保育社

新家勝, 1989. 宝塚のカミキリ2種. きべりはむし, 17 (2) 39.

田中稔, 2014. 兵庫県西宮市で得られたテツイロヒメカミキリの斑紋変異個体. 月刊むし, 521: 56-57.

小西宏明・長谷川道明, 2011. 愛知県から確認されたテツイロヒメカミキリ. さやばねニューシリーズ, 4: 33-34.